

Colour Schemes for the Flower Garden

翻訳勉強会の報告

土屋 昌子(学園史料室)

1. “Colour Schemes for the Flower Garden”

『フラワーガーデンの色彩設計(仮題)』はイギリスの著名な女性園芸家、Gertrude Jekyll (1843～1932 以下ジークルと仮略記)の主著とされる彼女の12冊目の著作で、1914年に出版された。ジークルは庭における色彩の重要性を主張し、庭園において最初にカラー・スキームを実践したアーティスト・ガーデナー(artist-gardener)などと称されるが¹、「植物を美しい絵画を描きあげるようにもちいる」というその理念と実践が、現在の英国を代表するイングリッシュ・ガーデン、Sissinghurst Castle Garden(シシングハースト城庭園)やHidcote Manor Garden(ヒドコート・マナー・ガーデン)に継承されている。

タイトルの「Colour Scheme(カラー・スキーム)」とは、花壇の色どりを統一するためにおこなう「色彩計画」のことをさすが、庭園における色彩調和(カラー・ハーモニー)の方法としてジークルによって提案され、以後、色彩を重視する庭の基本的手法として定着している。「計画」もしくは「設計」というと建築用語のような多少堅苦しいイメージがあるが、色彩学では「色彩調和論」をもとにおこなう演出技術であり、色の配置の方法として一般的に用いられる用語である。

本書はその庭の色使いによって「色彩の魔術師」ともよばれたジークルの色彩論として名高いが、色彩についてだけではなく、森や風景の描写があ

り、ジークル自身が撮影したモノクロの写真と自筆の設計図をもとにした造園上の庭の構図や設計、庭園における建造物や鉢物の配置の意味、植物の栽培管理、植栽方法などについて彼女の主張が述べられており、それらの背景となるジークルの造園理念が随所に散りばめられている。英国で20世紀の園芸に最も影響を与えた本と評されている²。

2 . Gertrude Jekyll

1) 英国庭園史におけるジークルと日本での認知度

ガートルード・ジークルその人については、10年ほど前から日本でもイギリスの園芸事情に詳しい園芸家らによってカラー写真の多い園芸誌などでとりあげられてきた。一例として広田静子³『イギリス 花の庭』では、英国女流園芸家の筆頭としてジークルを取り上げ、彼女の流れを汲む現代英国庭園の美しい図版を含む丹念な取材記録が掲載されている⁴。

一方、西洋庭園史の分野では岡崎文彬『ヨーロッパの造園』(1969年)で、すでに一定のジークルへの言及がある⁵。その後アン・スコット・ジェイムズの“The Pleasure Garden”(初版1979年)邦訳『庭の楽しみ』(1984年)で「サリー派」として紹介されているが⁶、1980年代を通じてこれ以上の紹介は見当たらなかったように思う。

2000年を境に19～20世紀までを視野に入れた日本人による一般向けの英国庭園史が出版されるようになり⁹、18世紀の風景式庭園の伝統を受け継ぎながら、現代の英国式庭園(イングリッシュ・ガーデン)といわれる庭園様式の形成がこの時代に行われたことが示されるようになった。

時をおなじくして、ガーデニングに関する新書版などの中にもジークルの名がみられるようになり⁸、2001年にはジークルとその色彩論を紹介する単行本としては初めて『イングリッシュガーデンの源流－ミス・ジークルの花の庭－』⁹が出版された。このような経過を経てジークルはようやく日本でも、現代の英国式庭園「イングリッシュ・ガーデン」の成立を主導した一人として、英国庭園史の中に位置づけられるようになってきたと考える。

しかしその後も依然として名前 Jeykll のカタカナ表記さえジークル、ジェイキル、ジェキル、ジェイクル、ジークルなどとばらばらで一定しない。松崎里美『アメリカン・ボーダーガーデン』では、ジークルのカラー・スキームはアメリカでも信奉者が多いが、特に「初心者が多い」と紹介されている¹⁰。これらは、これまで日本でジークルに関する認知度が低かったこと、あるいは、英国においても近年指摘されているジークルに対する一般の不正確な理解(後述)によるのではないかと推察する。

2) 生涯

いくつかの伝記が存在するが、邦訳はない。ジークルは89歳と長命で、80代にも著作のある多彩で長い生涯は、しばしば前半と後半に分けられる。17歳で美術学校に学び画家を志した若き芸術家は、ターナーに傾倒して模写に励み、20代半ばでウィリアム・モリスと出会い、アーツ・アンド・クラフツ運動の推進者となる。グランドツアーともいえる地中海沿岸諸国への遊学経験を経て、画家としてのキャリアを積みながら、共に幼いときから親しんだ植物をデザインに取り入れた工芸品や手芸、彫金、彫刻、建物の内装などを手がけた。その後半へのターニングポイントは痛みを伴う視力の低下で、これにより画筆を折ることを余儀なくされた40代のなかば、ジークルがその芸術に対する情熱を愛する庭に向けたとき、これをわかちあう建築家、エドウィン・ラッチェンス¹²と出会う。

アーツ・アンド・クラフツ運動の推進者であったジークルと、生まれ育った英国南部サリー州に残る伝統的な建築の様式美や文化的風景を愛するラッチェンスはたちまち意気投合したという¹³。ジークルは自邸の新築をラッチェンスに依頼し、敷地内の4ヘクタールの森を含む庭の中に植物を用いてさまざまな風景を描いていく。それは考え抜かれた構図と色彩設計をもとに、植物のもつ本来の美しさをいかに引き出して用いるかという実験の試行錯誤の繰り返しであった。そのなかからまもなく、人々をうならせ、自らも満足できる美しいカラーハーモニーを奏でる庭が出現してくる。

彼女が自邸の造園を始めたのはラッチェンスと出会う10年余り前、

ロンドンから故郷サリー州に戻って地所を求めたときにさかのぼるが、造園を始めて数年後の1880年には、当時住んでいたマンステッド・ハウスの庭の宿根草ボーダーが評判をよぶようになり、ラッチェンスと出会ったときにはすでに園芸家としての名声を博していた。建築にも造詣の深かったジークルとラッチェンスとのコラボレーションは建築と庭の融合をもたらし「ラッチェンスの家とジークルの庭」と呼ばれた英国式の生活様式 (the English way of life) の流行を生む。これ以後の後半生で、ジークルは園芸家として250を超える庭のデザイン、2000を超える園芸雑誌への投稿、13冊に及ぶ著作をものにしていく。画家、工芸家、写真家、作家、ガーデン・デザイナー、園芸家など、その多彩な才能は、ひとつひとつどれをとってもそこから専門家としての力量がうかがえるマルチ・タレントぶりである。

3. 訳出の背景

1995年頃、筆者は当時恵泉女学園短大園芸生活学科教授で英国ウィズレーガーデンでの研修を終えて戻られた西村悟郎先生よりこの本の訳出を勧められ、おおよその形をとった2001年から紆余曲折を経て、昨年(2005年)園芸文化研究所でその翻訳を用いた勉強会が始まることになった。

前記したように、当時ジークルについては西洋庭園史の分野ではある程度紹介されていたが、園芸関係者のあいだでは、風評はあるがじっさいにはよくわからないというのが一般的な状況のようであった。その理由はいくつかあると思うが、まず著作の邦訳がない点があげられる。主著とされる本書“Colour Schemes for the Flower Garden”は、500近い植物名が基本的に学名表記でなされているため一般的には読みづらい。訳出当初、学名変更やすでに品種がなくなっているなどで、調べてもわからないものが約1割あった。また文章は散文的なため、残念ながらこれも読みにくい、訳しにくいという感想につながる。

ではそもそも園芸の専門家ではない筆者が、なぜそのような本書の訳出をまがりなりにも終えられたかといえ、学名に対してあまり違和感がな

く、むしろ描写される風景に共感を覚えながら喜びをもって訳出をすすめることができたためである。これは恵泉女学園の短大で花壇園芸学を山口美智子先生から教えられたことに負う。植物名は徹底して学名を暗記させられその数は年間250を越えていたと記憶するが、そのほとんどは学内で栽培されていた。また訳出当時、筆者が生活していた恵泉女学園短大キャンパスには、花卉園芸学専攻のうち、花壇設計および花壇材料の調査を卒業論文のテーマとする学生が管理(設計、栽培、調査)するボーダーが7つあり、学生が日夜作業にいそしむ姿は日常風景であった。そのようなキャンパスで、学生と生活を共にしながら、園芸の専門性と教育的側面に思いをひそめつつ本書を読んでいたのである。ボーダー花壇を完成したと言われるジークルの主張を理解したいという気持ちが自然に働いたのは、むしろ当然のことであり幸福なことだった。

山口先生の花壇設計、ボーダー花壇と、ジークルのカラースキームは必ずしも一致するものではないと思うが、本書のところどころにふとあらわれる、ジークルの篤い信仰に裏打ちされた、人間の手の技を通して感得されうる芸術—植物を用いて生きた絵画を描くこと—へ向かう姿勢のなかに、山口先生と共通の姿、理想をみる想いがしたことをここに述べておくことは許されるだろうか。本書の2章「森」のなかに、次のような箇所がある。——美的な感覚は神の賜物であり、それを豊かに授けられた人はどんなに感謝してもしきれないでしょう。この賜物を年月をかけて研鑽し、思索し、そして芸術の表現方法のいずれかに忠実に応用することによってはぐくむことは、芸術家の頭と心と手を訓練することにほかなりません。人間の心は美に対する感受性が訓練されればされるほど、この尊い賜物を用いる機会を多く見出すようになり、日常の暮らしの中の最も単純なことがらにさえ、より直接的に専念し、いつでもそれを改善するようになるのです。——日本で最初に女子ための高等園芸教育機関を設け、園芸教育を長く培ってきた恵泉女学園で、いま本書の翻訳作業がとりあげられていることは偶然ではないように思われる。

4. 勉強会報告

本書はジークルが自邸の庭で実際に行った造園をもとに、具体的で詳細な叙述がなされている園芸書である。しかし近年英国でのジークルの再評価に伴い、本書について次のような指摘もある。1988年に本書の新装改訂版を出したR. ビスグローブ¹⁴は、その序文で「彼女の文体は流麗で心地よいため、人はそれに流されて、知らず知らず、必ずしも本当ではないことを次々と鵜呑みにさせられて絶対視させられてしまう。」¹⁵と述べている。彼によれば、本書はジークルが生涯の経験をつぎ込んだものであるが、逆にこの本によって「ジークルのカラー・スキームは、庭を、パステルカラーの宿根草ボーダーを持つ小さな区画に分割すべきだという表層的で不正確な庭づくりのポリシーとして理解されてしまうことになった」¹⁶。

本書が出版された1914年にはジークルは69歳で、すでに30年以上の造園歴をもっていた。また本書の最初の構想はロビンソン¹⁷が1883年に出版した“The English Flower Garden”¹⁸のなかにすでに見られるものである¹⁹。これが発展して1908年に9冊目の著作として“Colour in the Flower Garden”が出版され、その第6版があらたに“Colour Schemes for the Flower Garden”として出版されたという経緯がある。

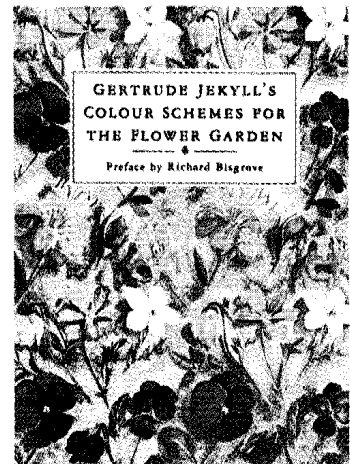
本書を精読しまたこれらのことを通して考えてみたとき、本書は園芸の実践にもとづく色彩論と銘打たれながら、論理的な記述ではない。ジークルが英国内でカラースキームについて一定の評価を確立してからの改訂版であるというなどの理由から、その翻訳は、実践的な経験にもとづく知識とジークルの全体像の理解なしには難しいことが推察された。ある程度のジークル研究なしには成立しなかったといえる。筆者の翻訳を園芸文化研究所で勉強会をもって扱ってくださるというお申し出を受けたとき、メンバーの中に経験のある園芸家を交えていただきたいというのは当初からの私の強い希望だったが、勉強会には所長の箱田先生をはじめ園芸学、造園学、植物学、生態学を専門とする園文研の先生方の他にも、英国文学、英国史を専門とする先生方、また本書を勧めてくださった西村先生、現在大学の園芸教育の現場で仕事にあたる園芸準備室のスタッフ、さらに園文

研のスタッフの方々も加わってくださった。

勉強会では、新妻先生の提案で私が底本とした1982年版ではなく、前出のビスグロブ氏が改訂版として出したもの(1988年版)を基本的に用いている。植物名が全面的に見直され、学名の変更のあったものなどについては新しいものに、失われた品種については現在のもので最



1982年(復刻版)



-Preface by Richard Bisgrove-
1988年(改訂版)

も近いものが参考として示されている反面、ジークル手書きの設計図面や写真はほぼ割愛されていて、両者の比較検討もひとつのテーマになっている。

これまでのところでは、植物名の訳語の確認、専門用語の確認作業だけで全体の8~9割がさかれている。英国と日本の気候や植生の違いからくる植物名の整合性や、歴史的文化的に異なる園芸的背景から用語をどのように解説するかなど難問は多い。例えば、オーク(oak)は英名ではコナラ属の総称で、当初「カシ」としたが、カシが常緑であるのに対してオークは落葉性の樹種をさすことが多く、同じコナラ属(Quercus)ではあるが日本ではナラやカシワに近いとの指摘があった。英国人が民族的にこの木に寄せる特別な感情や、さらにジークルと関係の深いコテージの家屋に使われる「オーク材」などの訳語との関係もあり、そのまま「オーク」と訳すか、あるいは「ナラ」とするかなど検討された。用語ではフラワー・ボーダーの概念や、ジークルがdrift(ドリフト)と名づけた植栽の手法など、英国では一定の評価のある概念も日本では一般的でないものが多い。

庭園史の叙述でときに、著者(あるいは翻訳者)が英米文学や建築の専門家であって、植物名や園芸の用語に苦心している様子を感じることがある。ジークルの著作は理論的ではないが、徹底した経験主義に立つ園芸家

の叙述である。日本の園芸の現状に少しでも近く、実際に園芸や造園に携わる人々も違和感なく読めるような翻訳にしたいと願うものである。

残りの1～2割で、新妻先生が『園芸文化』第2号で取り上げているロビンソンや彼が提唱した「ワイルド・ガーデン」との関係、庭園史の様式の変遷、色彩論などが話題になっている。NHK-BSで放映されたアプトン・グレイのマナーハウス²⁰と本書の舞台であるマンステッド・ウッズの庭のビデオも参加者の指摘があり、勉強会で取り上げた。翻訳から派生してくる、あるいは翻訳を補うこれらのジークル研究に関する問題は、いまの段階では勉強会の合間での関係書籍や研究課題の紹介、交換により補われている。

植物はすべて確認作業をしているが、特にバラについては、2004年に出版された野村和子『オールド・ローズ花図譜』(小学館)に多くを負った。ジークルの愛したバラ(現在ではオールド・ローズに含まれる)のほとんどはそれまで確認が難しかったが、この本でほぼ全部をしかもカラー図版で確認することができた。

毎回およそ2章ずつ9回の集まりを重ねてきているが、10回で18章全体をひとわたり見通せる段取りである。

参考文献

- 1 *GERTRUDE JEKYLL-A CELEBRATION*-1993 Museum of Garden History
- 2 *Gertrude Jekyll's Colour Schemes for the Flower Garden* 1988 R.Bisgrove
Frances Lincoln
- 3 ハーブ研究家。
- 4 『イギリス 花の庭』1997 広田静子(文化出版局)
- 5 『ヨーロッパの造園』1969 岡崎文彬(鹿島出版会)
- 6 『庭の楽しみ』1979 アン・スコット・ジェイムズ著 横山正訳 (鹿島出版会)
- 7 『英国ガーデン物語』1997 赤川裕(研究社出版)、『英国式庭園』1999 中尾真理(講談社)、『英国の庭園』2004 岩切正介(法政大学出版局)など
- 8 『ガーデニングの愉しみ』三井秀樹1998(中公新書)など

- 9 『イングリッシュガーデンの源流－ミス・ジーキルの花の庭－』2001 宮前保子(学芸出版社)
- 10 『アメリカン・ボーダーガーデン』2000 松崎里美 (主婦の生活社)
- 11 Edwin Lutyens (1869 ~ 1944)
- 12 William Morris (1834 ~ 1896)
- 13 *Gertrude Jekyll* Betty Massingham Lifelines37 Shire Publications Ltd.
- 14 Richard Bisgrove 著書に*The Gardens of Gertrude Jekyll* 1992 等がある
- 15 前出 *Gertrude Jekyll's Colour Schemes for the Flower Garden*
- 16 同
- 17 William Robinson(1838 ~ 1935)
- 18 *The English Flower Garden* William Robinson 1883 (初版)
BLOOMSBURY GARDEN CLASSICS(復刻版 ペーパーバック 1997年)
- 19 ジーキルはこの本のなかの「Colour in the Flower Garden」の章を担当している。
- 20 The Manor House, Upton Grey ジーキルの設計図をもとに再現された庭園。再現までを記録した *GERTRUDE JEKYLL'S LOST GARDEN-The Restroration of an Edwardian Masterpiece-* Rosamund Wallinger 2000 Garden Art Press がある。